



塩竈市市制施行80周年記念
新春座談会

左から、渡辺恵美さん(司会)、大沼剛宏さん、太田真さん、伊藤議長
松田公太さん、佐藤市長、高田彩さん、佐藤強さん、今野元博さん

20年後の「塩竈」をつくる [後編]

市制 100 年となる 20 年後に向け、魅力ある「塩竈」のまちづくりをテーマに、前編（1 月号掲載）に続き、後編では、アートの力や海の魅力を活用した取り組みを交え語り合いました。

アートの視点での まちづくり

渡辺 ■塩竈にアートの風を引き込んでいただいている高田さんは、ワークショップなども多く開催していますが、塩竈でのアート活動についてはどのように感じていますか。

高田 ■美術鑑賞だけではなく、さまざまな体験を通して感性や思考力、ゼロから生み出す力である創造力を育むことを大切に、プログラムを展開しています。受け身でも楽に生きることができるよう、利便的な時代だからこそ、そのような能動的な力を育みたいと考えています。

地域の方と取り組んでいる「チルドレンズ・アート・ミュージアムしおがま（以下、チルミュしおがま）」という事例では、アーティストや学生、主婦、学校教員、保育士、市職員など、さまざまな職種の方と地域の課題に向き合いながら、アートの視点で実験的に取り組んでいます。「このまちには何もない」と嘆くのではなく、個々人が持っているスキルや能力を活かしあって、互いの力を発揮しながら、思考を巡らせ、前向きに、何より楽しみながら課題に向き合う機会を作っています。美術館もそのような場の一つです。

このようなイベントを開催すると、



杉村惇美術館を会場に開催された「チルドレンズ・アート・ミュージアムしおがま」

市内外から参加者が集まります。市外の方には「塩竈ではこんな体験ができるなんて羨ましい」と毎回家族で参加くださったたり、市内の方には「実はこんな良いまちに住んでいるんだね」と客観的にこのまちの良さに気づいてもらえたり、継続的に参加いただける効果があります。アーティストの力を借りながら、積極的にそのような場づくりをすることで、美術館が塩竈の魅力や文化を発信する拠点になれるよう取り組んでいきたいと思っています。

文化芸術は一般的に抽象的で分かりにくい側面を持ち、美術館は非日常的な場として日常生活から切り離して捉えられがちですが、幸いにも杉村惇美術館は、公民館と併設して

おり、塩竈の歴史・文化を肌で感じることが出来る立地にあります。だからこそ、観光や定住促進など、地域に必要とされる要素につながる取り組みを積極的に行って、このまちに貢献していきたいと考えています。チルミュしおがまの参加者からは「塩竈に移り住んでも良いね」という声も聞かれます。このまちで暮らし住促進につながるのではないかと思います。



2014年から塩竈市杉村惇美術館統括を務める高田さん

渡辺 ■今はコロナ禍で、残念ながらイベントが中止となることも多かったと思います。それでも最近では、いろいろな手が携えてイベントを企画することが多くなっていますよね。高田さんが代表を務められているビルドフルーガスを立ち上げる時、アートの視点から塩竈のイメージはいかがでしたか。
高田 ■塩竈のイメージは、「若者たちの取り組みを面白がってくれる寛容なまち」「関われる余白のあるまち」

「可能性があるまち」ですね。幼少の頃の、塩竈での家族や友人との経験も大きく影響しています。吉番館で過ごしたり、エスプのイベントに参加したり、釣りを楽しんだり…。このまちで楽しんだ思い出が数多くあります。ポジティブな記憶の蓄積が、現在の私自身をこのまちとつないでくれているようにも思います。

今後さまざまな人がこのまちでポジティブな経験を積んでいけるよう、個性やスキルを発揮できる機会をつくっていききたいと思います。同時に、子どもたちの知的好奇心を刺激する体験や、感性を豊かにする機会を日常的につくっていききたいと思っています。親などの大人たちが楽しむ姿も子どもたちにたくさん見せていきたいですね。素敵な地域の先輩方が多いので、アートだけではなく、多様な切り口で場をつくっていききたいです。

先ほど、佐藤さんから話がありました。子ども味の覚を豊かにする食のワークショップも非常に興味深いです。この座談会のように異業種の方々と言葉を交わす機会はありたいです。市でもいろいろな機会を多くつくってくださるので、可能性が広がっていきます。まずは、アーティストや市外の人たちがこのまちと出会えるきっかけをつくりながら、

多様な価値観をこのまちに取り入れていきたいです。それと同時に、この地域が新たな発想に出会えるようにさまざまな機会をつくっていききたいです。

海の魅力を活かした まちづくり

渡辺 ■大沼さんは今どのようなことに取り組んでいらっしゃいますか。
大沼 ■現在、塩釜港奥部に整備されている北浜緑地周辺で、昨年の夏、「シーサイドピクニック」というイベントを行いました。仮設の浮桟橋のデッキなどを出して、そこからカヤックやSUPなどで自由に水上散歩をしたり、海の生き物を観察したりするなど、海を楽しむイベントです。新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、感染症対策を講じて開催日数も予定より減らし行いました。このエリアは公園と海が接する場所になります。私は、子どもの頃、塩竈の海で遊んだ記憶がありません。街の中心部に海と触れ合う体験ができる場所があれば、それを活かして、新しいコンテンツを作れば、水辺のエリアの魅力が高まるのではないかと考えました。



穏やかな街なかの水辺空間を活用した「シーサイドピクニック」の様子。カヤックやSUP(スタンドアップパドル)は若者やファミリー層に人気

実は、塩竈の人でも船に乗ることは、あまりありません。そのような体験を子どもうちに楽しんでおけば、地域の思い出として残ります。大人になって故郷を思い出すときに、あの時、こんなイベントがあったなという思い出が残っていけば、いずれ塩竈に帰ってくる可能性につながるかもしれません。そして今回、市役所の若手職員の皆さんと一緒に企画を作り、なんとか実現することができました。今後は地域の子どもたち、大人たちも含めて継続して開催できる関係づくりに取り組もうと思っています。

イベント開催後、カヤックなどに乗りたい人や、海の生き物を探す方が楽しい人など、いろいろな楽しみ方をする人がいて、多様な可能性

を感じました。海の近くで遊べるという魅力はまちの力として残していきたいと思っています。それに連結した形で商業エリアにつながる観光のコンテンツを作ることができれば、まちの経済にもつなげていけるのかなと思います。例えば、海に来た人たちがお昼に街なかでご飯を食べる帰るなどの流れですね。それと、使われていない港の海面を利用することで、塩竈の活性化につなげられるプランを考えています。



水辺の公共空間には、いろいろな楽しみを生み出す可能性があるという大沼さん

松田 ■例えば、カヤックの発着場所にカフェみたいなものを作るのはどうでしょうか。私もときどき湘南の方に行くのですが、SUPやカヤックなどをするところにカフェがあると、そこで眺めながら、自分の番を待ったりとか、もしくはお子さんだけSUPを楽しんでいて、親や家族がカフェでコーヒーを飲んだりしてくつろいだりと、すごく良い雰囲気のスポートができます。カヤックやSUPにプラスして、ちょっとしたカフェなどを併設すると、人が集ま

りやすい場所になっていくし、人を呼んでくるじゃないですか、おしゃれなカフェができたよねって。市長 ■将来、この港の周辺をどう整備していくかは、皆さんと相談しながらやっていこうと思っています。港湾を管理している県が主になりませんが、やはり地元が動かないとできません。この水辺空間をしっかりと作り上げていくことが必要だと思います。

松田 ■湘南あたりのカフェは、設備投資にお金をかけるのではなく、一見簡素なのですが、手作り感があって、すごく和んでいて、良い感じだになっていうところが結構あります。サーファーが集まったりするので、そういったカフェなどは低コストで作れると思いますよ。

高田 ■お金をかけて整備をしなくても、まずは実験的にフードトラックであれば、すぐに設置できます。海辺で過ごす、それを定期的にやってみて、日常化していくことが必要だと思います。

松田 ■その通りだと思います。3、4台フードトラックが集まれば、それも海に関連して：例えばガリッシュュリンプなど売ったり、もうひとつはコーヒーを売ったりするところとかが集まれば、海辺の雰囲気が出ますよね。フードトラックであればさらに低コストでできますね。

太田 ■塩竈は、おいしいものはありますが、屋外で食べる文化はないんですよ。どうしても建物の中で食べさせる方に向いてしまいます。もう少しフリーに外で食べさせる場所があると、良いなと思います。テレビで海外の街が映し出されると、パソルの下にテーブルやイスを並べて、楽しそうにお酒を飲んだり、ゆっくり外の風景を見たりしながら食事されているじゃないですか。塩竈でも、それができると思っていますよ。



座談会では佐藤さんからカキやホヤの美味しい食べ方などシェフならではの話題もあり盛り上がりしました

市長 ■まちなかのちょっとした空き地や道路などの公共空間を利用して、外で飲食をできるような規制緩和をして活動しやすい環境を作っていければと考えています。

まずは、モデル事業としてやってみて、その結果どのような効果をも



本町「くるくる広場」を利用して開催された「暮らしの市」

たらずのか検証させていただきたいです。港湾施設は難しいこともあるかもしれませんが、皆さんと共に積極的に、道路の使い方とか、行動に移していくことが大事だと思います。その努力をしないで難しいと言っているうちは、何もできないですから、そのハードルを越えるための行動とか、アイデアとか人の動かし方とか、そういうことをしっかり考えてやっていけば、やってやれないことはないと思います。大沼さんたちの活動も根性がいますが、絶対できますよ。

大沼 ■できるように算段をしていくということですね。

市長 ■そうですね、少しずつでもその努力をしていくことが、やっぱり重要ですね。

次世代へつなぐために 今やるべきこと



人と人とのつながりを大切に、チャレンジし続けてきた松田さん

松田 ■塩竈って良いなと思ったのは、武器がいろいろ揃っているところ。今後成長するための要素を持っているなど再認識しました。アートの話や食の話もありましたし、鹽竈神社など歴史的な建物や文化遺産がたくさんあります。日本中、世界中を回って見ても、その3点セットが揃っているまちは間違いなく成長しています。

少子高齢化、人口減少問題は塩竈だけが直面しているわけではありません。世界で同じような問題に直面しているわけで、少子高齢化は先進国であればあるほど、当たり前のことになっていく状況です。そのような中で、塩竈の魅力をいかに活用していくかということが大切ですね。



イベント「しおがまさま神々の月灯り」開催に合わせライトアップした老舗の建物。インスタスポットとなった

大沼 ■私の年代で同じ小学校に通っていた人が果たして何人塩竈に残っているのかを考えると、実は半分も残っていない可能性が高いと思います。子どもたちは財産であって、その子どもたちが一旦、外に出て塩竈に戻ってきたとき、まちづくりや商売を始められるような魅力あるまちにしていければ、20年後という可能性も目に見える範囲ではないかと思っています。それをうまく繋げるために何を仕掛けていくか考えながらやっています。

太田 ■やっぱり種をまかなくてはいいけないですね。高田さんがやっていることはまさに種まきであり、その最中と言えます。我々も一所懸命種まきをして、子どもがその種を拾って育ててくれることが一番だと思います。それが20年後に花開き、

作物ができるようにしていかなければならないですね。

高田 ■私たちも現場で新しいプロジェクトやアイデアが湧き出て、自分たちで動こうと思えば動けますが、塩竈は一年を通してたくさんのお祭りやイベントがあり、関わる人とはにかく忙しいですね。疲弊しないために、次の世代もそれぞれのフィールドで、志を共有しながら増やしながら一緒に動ける人をいかに増やしていくかが今の課題だと思います。

素敵なアイデアが出て、それを誰と誰に声をかけられるという感じがあるまちなので、同時進行しながら仲間を作りながら実現していったら素敵だなと思います。

議長 ■皆さんが、プレーヤーとして、その発想をかたちにするために、市役所は、その想いを理解し、伴走できる組織であることが必要と考えています。そして、皆さんは、地域の方々を巻き込んでいかなければならない。

多様な意見の中で、地域の方を巻き込んで一緒にまちづくりをしています。



「空き家や商店街の空き物件の問題も魅力創出のチャンスととらえることが大事」と語る伊藤議長

くようなリーダーシップをとれる人材がこれから必要だと私は思っています。そのためには、若いうちには外に出ていって、経験を積んで、その経験を生かそうと思って帰ってきた人が、塩竈でチャンスを実行できるまちにしていきたいですね。

市長 ■市民の皆さんと共に、自分たちのまちは自分たちでつくっていくという意識を持つことが必要です。松田さんのお話もぜひ市民の方にも知っていただきたいですね。本市も、意識を持って地元で頑張っている皆さんとつながり、一生の友達になれば、互いに良いだろうと考えています。ですが、物事を進めていくことはそう簡単にはうまくはいきませぬ。失敗しながらやっていくしかないと思っています。

皆さんからお話をいただき、魅力ある塩竈をつくるため、私たち行政では考えつかないことに取り組んでいることを改めて感じました。一所懸命に取り組む方々が、まちづくりの主役である市民の皆さんを巻き込み、人づくりのまちとして本市もそれを応援し、一緒になって本気を出して20年後この塩竈をつくってほしいようにしたいと思います。本日は本当にありがとうございます。



政策課市政情報係

☎3555-15728